

円覚寺

えんかくじ



鎌倉五山の第二位である。弘安5年(1282)八代執権北条時宗が(1251~84)開基、宋から招いた無学祖元(1226~86)が開山した。祖元は弘安3年(1280)、太宰府に着き、建長寺に入った。元寇の役で戦死した将兵の靈をなぐさめるため、時宗が円覚寺をつくり開山となった。祖元は宋にいるとき、侵入した元軍から首を斬られようとしたとき、泰然として「電光影裏春風を斬る」と言い、その徹底した悟りを示した人物である。

元寇という困難をかかえた時宗にとって、元軍に懾ることのなかった宋僧の祖元は、鎌倉幕府の対元政策に大きな影響を与えた。江戸時代には徳川幕府の保護を受け末期には誠拙禪師が中興し、明治になり訥宗演禪師(1860~1919)によって関東禅界の中心になつた。鈴木大拙、夏目漱石、徳富蘇峰が参禅し大正期の禅ブームを巻き起こした。



白鷺池



建長寺

けんちょうじ

執権北条時頼は、寛元4年(1246)、宋から来た蘭渓道隆(大覚禪師)を開山として、巨福呂坂上の地蔵堂を中心とする寺をつくった。この谷間はかつての刑場のあったところであった。寺は建長5年(1253)11月完成し、年号を寺名とする鎌倉第一の禪林である。年号を寺名とする奈良の永久寺、滋賀の延暦寺、京都の仁和寺、東京の寛永寺などとともに格式の高い寺である。創建当時の伽藍配置は明かではないが、総門から三門・仏殿・法堂・方丈などが一直線上に並ぶ配置は宋風禪寺の様式を残している。最盛時には塔頭49院を数えた。応永21年(1441)の一山焼失以後、寺運はかたむいたが、江戸時代に沢庵禪師が住んで徳川幕府の保護を受け、再び建



物も整っていた。しかし、関東大震災でほとんどの建物が倒壊。その後復興して今日にいたっている。

鎌倉五山 かまくらござん 入宋僧や渡来僧により開山された禅寺は、やがて南宋の制度化された五山にならない「鎌倉五山」が決められた。鎌倉五山は、その由縁と寺勢により、第一座建長寺、第二座円覚寺、第三座寿福寺、第四座淨智寺、第五座淨妙寺である。



鶴岡八幡宮

つるがおかはちまんぐう

昔もいまも八幡宮は、鎌倉の中心で多くの人が参拝する。毎年百万人をこえる正月の参拝客は七草ごろまで、鎌倉駅から段葛の上を通り社前へ絶えることがない。悪魔退散の破魔矢をもとめるのに苦労するほどにぎわう。

鶴岡の名は、源賴義が康平6年(1063)に京都の石清水八幡宮を由比郷に勧請した元八

幡の古名である。建久2年(1191)3月、鎌倉の大火で幕府や八幡宮が全焼した時、賴朝は4月に若宮の後方の大臣山で再建に着手、11月に完成した。改めて石清水八幡宮から神体を勧請したのが本宮(上宮)で、いまの鶴岡八幡宮である。若宮も再建され下宮とされ、山上と山下の両宮となつた。建久3年(1192)、賴朝は征夷大将軍に任命され、勅使応接の儀式が鶴岡八幡宮で行なわれた。勅使から除書を受ける名代人に三浦義澄が命じられた。

源 賴朝

みなとのよりと(1147~1190)熱田で生まれ京都で育つ。13歳のとき父義朝に従って平治の乱で戦つたが敗れ、東国に逃走の途中捕えられた。京都に護送されて斬罪にされようとしたところ、平清盛の継母の池の尼の同情によって助命された。伊豆蛭ヶ島の20年間の配流の中再起の時を待つた。北条時政の長女と将来を契り、その一族を味方にすることに成功した。治承4年(1180)、以仁王の令旨によって挙兵したが石橋山で敗れた。安房・上総・下総の武士たちは中央に対する不満が強かった



賴朝の政治

鎌倉幕府を支えた大きな力は鉄製農具の発達、人糞肥料の採用による莊園の生産力の増大と強力な農民管理であった。地方豪族の所領の所有権、知行権を公認することを安堵といい、主君よりの御恩として主従関係で関東武士団の人心をつかんだ。賴朝は有力豪族から身分の低い者まで、必要に応じて「見参」という誓約を行ない家人とした。賴朝へ敬意を払つた「御」の字をつけ御家人と呼んだ。「いざ鎌倉」という言葉そのままに御家人は鎌倉殿へ忠勤を勧めた。御家人の管理に侍所を置き、大蔵館に公文所と門番所をひらいた。公文所は後に政所と改称された。門番所は訴訟を扱う。平氏が文治元年(1185)2月24日、瀬の浦で敗走すると、平家残党の名目で守護・地頭を置くことを後白河法皇に要請し特許され、一国一人ずつ置く幕府の地方長官で、治安・警察、土木事業を行ない、有事の際は御家人を指揮し、多くは関東出身の御家人を当てた。

地頭は郡・郷・庄などに置かれ治安・警察・年貢の取り立てを行なつた。賴朝は武士の統率として総守護・総地頭となつた。鎌倉殿の代人である守護・地頭、とくに民衆と接する地頭は「泣く子も黙る」といわれ恐れられた。平家追討の名目のこの組織は、義経・行家の探索につかわれた。後白河法皇の突然の死で建久3年(1192)、賴朝は征夷大将軍を挙げ、鎌倉幕府が確立したのである。

源賴朝像



江の島

えのしま



江の島は、周囲2.5km、面積0.18平方km、最高60mの台地状の小島である。第3紀の凝灰岩・凝灰質砂岩から成り、その上を開東ローム層がおおっている。第4紀更新世のころ、対岸の片瀬・腰越とともに一つの陸地をなしていた。それが、ともに陥没し、海波の侵蝕をうけた。その後、また隆起して、その上にローム層が堆積した。さらに断層運動によって対岸より切断され、離島となったのが、およそ5万年前といわれる。



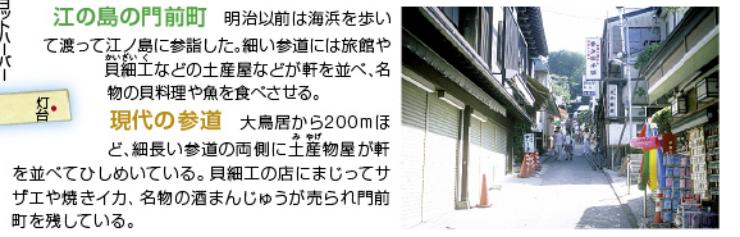
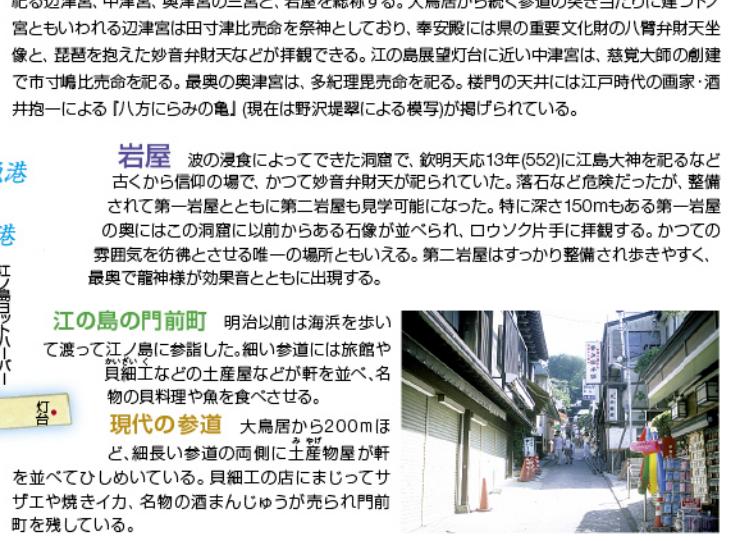
片瀬海水浴場(東浜) 宮島は瀬戸内海の神、竹生島は琵琶湖の鎮守の神、江ノ島は太平洋という大海に面した鎮守の弁才天である。明治24年(1891)はじめ木の板橋が架けられ、それまではすべて海浜を歩いて渡った。「金二銭」の渡り賃を払って橋板をたたいて渡ったといわれる。江戸時代の錦絵には「絵の島」と書かれている。

江島神社 江島神社とは、北九州の宗像神社や、広島の嚴島神社と同じ宗像三女神をそれぞれ祀る辺津宮、中津宮、奥津宮の三宮と、岩屋を総称する。大鳥居から続く参道の突き当たりに建つ下ノ宮ともいわれる辺津宮は田寸津比売命を祭神としており、奉安殿には県の重要文化財の八臂弁財天坐像と、琵琶を抱えた妙音弁財天などが拝観できる。江の島展望灯台に近い中津宮は、慈覚大師の創建で市寸嶋比賣命を祀る。最奥の奥津宮は、多紀理毘賣命を祀る。楼門の天井には江戸時代の画家・酒井抱一による「八方にらみの亀」(現在は野沢提琴による模写)が掲げられている。

岩屋 波の浸食によってできた洞窟で、欽明天応13年(552)に江島大神を祀るなど古から信仰の場で、かつて妙音弁財天が祀られていた。落石など危険だったが、整備されて第一岩屋とともに第二岩屋も見学可能になった。特に深さ150mもある第一岩屋の奥にはこの洞窟に以前からある石像が並べられ、ロウソク片手に拝観する。かつての霧氹を彷彿とさせる唯一の場所ともいえる。第二岩屋はすっかり整備され歩きやすく、最奥で龍神様が効果音とともに出現する。

江の島の門前町 明治以前は海浜を歩いて渡って江ノ島に参詣した。細い参道には旅館や貝細工などの土産屋などが軒を並べ、名物の貝料理や魚を食べさせる。

現代の参道 大鳥居から200mほど、細長い参道の両側に土産物屋が軒を並べてひしめいている。貝細工の店にまじってサザエや焼きイカ、名物の酒まんじゅうが売られる門前町を残している。



大仏

(高徳院)だいぶつ



(国宝・鎌倉) 銅造、像高11.5m。建長年間(1249~56)の制作と考えられている。像は鉛分が多く、渡金に適していないので、造像時代から金箔を押して仕上げられた。奈良の大仏は、初鋳も鎌倉時代の再鋳も渡來人の技術によつて造られた。与謝野晶子の歌に釈迦牟尼はとあるが、釈迦ではなく阿弥陀如来坐像である。大仏の胎内は空洞で铸造の技術が見られる。階段を上ると背面の明り窓から下をのぞける。大仏のまわりに大きな土台石が点在している。

はとあるが、釈迦ではなく阿弥陀如来坐像である。大仏の胎内は空洞で铸造の技術が見られる。階段を上ると背面の明り窓から下をのぞける。大仏のまわりに大きな土台石が点在している。

長谷寺 大和の長谷寺本尊と同木異体の觀音像をまつる。元正天皇の養老年間、徳道上人は大和國初瀬に蘆木を見つけ、両断して2体を彫刻、本木の1体を大和長谷寺に、末木の1体を伊勢の海から流し漂着した所を開いたのが新長谷寺だといふ。長谷觀音付近から大仏のあたりまでを長谷通りと呼んでいるが、鎌倉時代の市街は東の大町、小町から材木座海岸が中心であった。門前町が繁盛するのは坂東三十三ヶ所巡りが盛んになる江戸時代で、第4番札所であった。

觀音堂 本尊十一面觀音像を安置する。高さ9.18mの巨大なもので、右手に錫杖、左手に蓮華をもち、大和長谷寺と同じである。時代もほぼ同じで足利時代の特色を示している。足利尊氏が金箔をほどこし、明徳3年(1392)に義満が光背を造つて納めたと伝えられている。



由比ヶ浜

ゆいがはま



相模湾に面する砂浜で鎌倉の前浜になる。稻村ヶ崎から飯島ヶ崎までの海岸をさしていいたが、今は中央部に注ぐ滑川の河口より西岸をさし、東岸を材木座海岸とわけている。稻村ヶ崎寄りの坂ノ下は漁村として鎌倉時代から開けていた。いま夏は海水浴で遊ぶものが多くなり、昭和に入って横須賀線が電化されると、日帰りの海水浴客が由比ヶ浜に来るようになり「海の銀座」と呼ばれば、海の流行がここから生まれた。

